## 山形大学生海外派遣プログラム実施報告書

山形大学工学部情報科学科1年 小泉宗之 ラトビア大学2月22日~3月28日

私はラトビアの日本語教室では上級クラスを主に担当することになった。上級クラスということで扱う内容には悩んだが、敬語やことわざ、漢字のへんやつくり等を中心に行った。問題となったのは難易度調整である。はじめは書き順とともに初歩的な漢字を教えようとしていたが、何人からか簡単すぎるとの指摘を受けてしまった。その次の回からは敬語等の概念を説明しようとしたが、英語で説明するということがそもそも難し



く、相手にとっても理解が難しいようだった。とはいっても、そのときに来ていた一部の意欲旺盛な生徒は既に敬語の概念の学習をあらかたすませてしまっていた。こうした上級クラスの中での知識量の違いは教える側にとって難しい問題だった。そうした問題を克服するためにことわざなどの一授業で誰でも取り組める課題を導入した。また、リクエストを生徒から募集し、授業内に反映させた。

現地生徒とのコミュニケーションの中では自分の英語がまだ拙いこと、相手の英語が 早口な上に訛りがあること等の要因が複合的に重なった結果、相手とのコミュニケーションが難しいことも何度もあった。加えて日本語教室の外では現地学生同士は当然ラト

ビア語で会話しているため何を言っているのかも わからない。また、大学外では英語すら通じること のない人々がいるなどと、言葉以外の手段でコミュ ニケーションをはかる必要があった。プログラムに 参加してみて、どこの国であれ、その国の言葉をあ る程度学習しなければ本当の意味でその国に行っ たということにはならないのではないかという気 がしている。



さて、一部言葉の通じない異国で一ヶ月を過ごしたことによって、日本に帰ってきてからは知らない誰かと話すのにも抵抗が全くなくなった。日本語ができる日本人なら当然のことだが日本は本当に暮らしやすい。ただ、相反するようだが海外へ行くことにも抵抗がなくなった。一度経験してしまうと海外も思った以上に住みやすい土地であるの



は確かである。言語の壁、その一点をのぞけば。今回 の学生大使プログラムという貴重な経験を経て、より グローバルな思考、ひいては自分の将来の選択肢が大 幅に広がった。また、今後自分に必要な課題も見えて きた。英語力、ロシア語力は今後もますます必要にな っていくことだろう。次に海外に行くまでに十分な語 学力をつけていきたい。